

学修成果の可視化 ③

学生の海外渡航状況について初調査

大学院教育強化推進センター／高大接続・全学教育推進センター 市村 光之

「日本の若者は、一体どこに行ったのですか？」
5年前、グローバル人材調査最初の訪問地・インドのニューデリーで、ある日系メーカーの駐在員から投げかけられた問いでした。インドはバックパッカーの聖地です。最近、中国や韓国の若者が増えた一方で、日本人を見かけなくなったそうです。インド・東南アジアを皮切りに、西欧、中東、北米・中南米と調査しましたが、筆者の感覚でも、ひと昔前に比べ、日本人を見かけなくなりました。各地の観光パンフレットも、欧州言語に加え中国語、ハングル語版があっても、日本語版はないことがしばしばです。少なくとも観光の面では、海外における日本のプレゼンスが下がっていると実感しました。

今年のグローバル人材調査では、海外赴任はしたくない、と訴える商社マンがいることも耳にしました。大学生に限らず、若手社会人も内向き志向が指摘されています。では、本学の学生たちの海外渡航実態はどうなのでしょう。

学生が自身の学修・生活行動や学修成果を記録する《学生プロフィール》をYNU学生ポートフォリオに導入したことは、昨年度の本ニュースレター（Vol.10）で報告した通りです。学生にとっては主体的な学びをデザインするツールであり、大学にとっては学生の学修行動や成果を分析し、教育改善に結びつけるツールです。学内の活動だけでなく、留学やインターンシップ、その他の学外活動も、学生にとって貴重な学修機会です。

今年度から、そうした学外活動を記録する機能を学生プロフィールに追加し、学生の学外活動の実態を初めて

把握できるようになりました。今回は、留学等の海外渡航状況について紹介します。

本学学生は3年次までに16%が海外渡航を体験している

留学、語学研修、海外インターンシップ、調査研究、学会出席、観光等、何らかの海外渡航体験の有無を訊ねたところ、全学で16.0%が体験ありと回答しました。今回の学生プロフィール入力は、新2～4年生を対象にH31年4月に実施しました。実質的に1～3年次の集計になり、4年次の卒業旅行等は含みませんので、思いのほか学生たちは活発に海外に行っているようです。近くて安価に行きやすい東・東南アジアが約5割を占め、北米と西欧が3割と続きます（図1）。国別では米国、タイ、韓国、オーストラリア、フィリピン、イギリスの順です。

渡航目的別に見ると、やはり観光が約6割を占めますが、留学・語学研修で2割強、調査研究も1割弱弱います（図2）。学部別では、経済、経営学部は留学・語学研修の比率が他学部 비해高く、留学の推進に力を入れている成果と言えるでしょう。一方、教育、理工学部は観光が高いですが、渡航者の比率は他学部と変わりません。社会系学部 비해必修科目などカリキュラムがきついで学生たちは海外体験を積む努力をしています。都市科学部は専攻科目等との係わりからか、調査研究が目立ち、学部としての特徴が顕れています。

図1：渡航先割合：全学

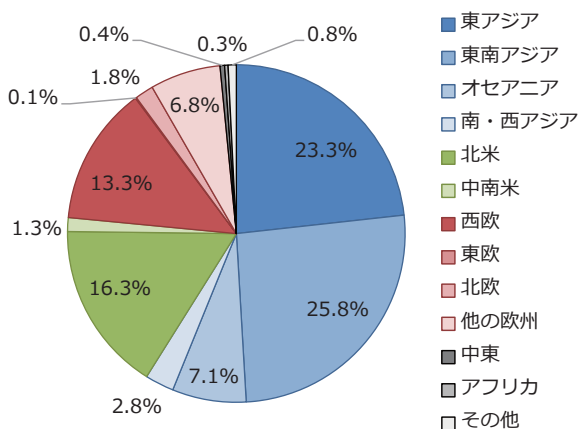
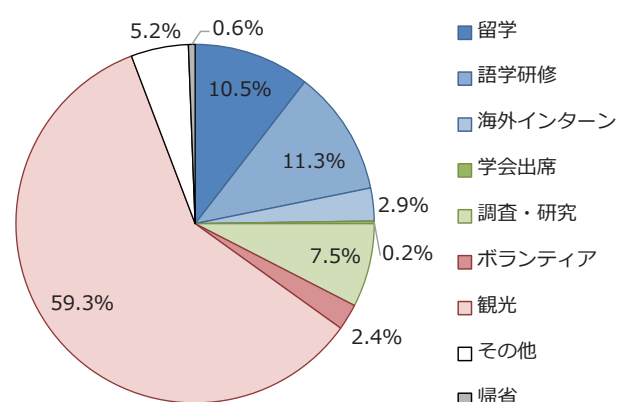


図2：渡航目的別割合：全学



留学期間は9か月～1年 語学研修は1か月程度が中心

目的別に渡航期間を見ると（図3）、留学は9か月、1年程度、つまり1学年分の期間、留学するケースが多いですが、短期もあり期間はさまざまです。語学研修は、1か月程度を中心に1週間から2か月以内です。海外インターンは1週間～3週間未満が多いですが、半年またはそれ以上という長期も4名います。調査研究は1週間以内～2週間未満が大半を占めます。観光は2週間未満がほとんどです。

学生が海外渡航をする、または渡航を開始する時期は、春休みの2～3月が最も多く、夏休みの8～9月が続き、これら4か月で大半を占めます。その他の月はそれぞれ10名前後に留まります。また、渡航時期を学部別に見ると目立つ差異はありません。本学では、H29年度より2学期6ターム（1タームは8週間）併用制を導入し、新設の都市科学部は6ターム制でスタートしました。学期を半分に区切ることで、留学等の学外活動をしやすい狙いもあります。ターム制を実効あるものにするためには、活用事例を蓄積し学生に周知、理解を図る必要があります。それには時間がかかりますので、ターム制の効果測定はそれを待たなければなりません。

2年次に最も活発に海外渡航 3年次は就職活動の影響あり減少

最後に渡航年次ごとの人数を見てみましょう。全般的に2年次の渡航が活発です。目的別で見ると、留学は2年次が多く、語学研修は1年次が多いです（図4）。

学部別の人数では、人文社会系学部はやはり2年次が最も多く、3年次で減少します（図5）。これは就職活動の影響と推測できます。一方、理工学部は年々上昇し、3年次が最も多くなります。理系は大学院進学を前提にした学生が大半ですので、3年次で就職活動の影響を受けないからでしょう。

（注：理工学部の入学定員は他学部の約2倍強。都市科学部は新設のため1～2年次のみの集計）

海外に出ればよい、という単純なものではありませんが、異文化の空気に触れ、日本とは異なる日常を垣間見る体験は、学生たちの視野を拓けるきっかけ作りとして貴重です。学業とバランスを取りつつ海外体験を積めるよう、今後も推移を分析します。なお、本件の詳細な報告書は下記より公開しています（本学関係者のみ）。

サイボウズのファイル管理を開く

高大接続・全学教育推進センター>学生プロフィール>2019年と順に開く

図3：目的別の渡航期間

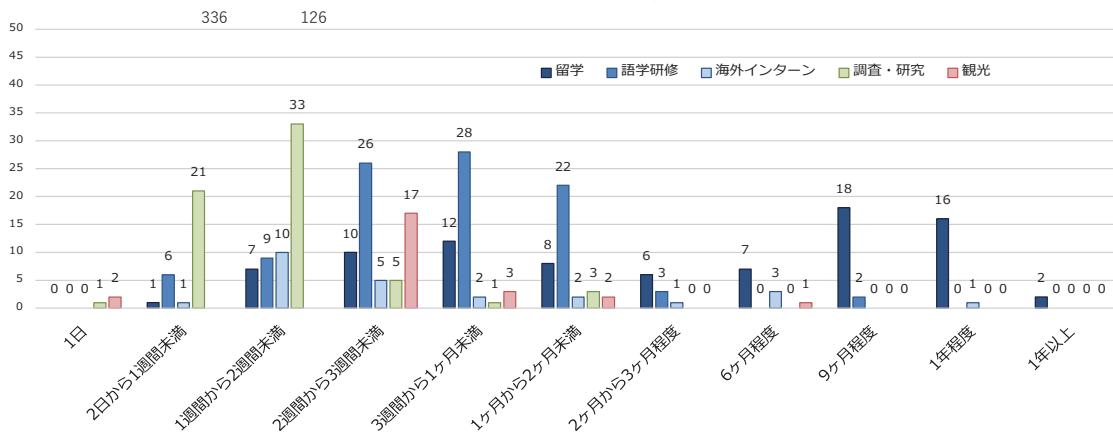


図4：目的別の渡航年次

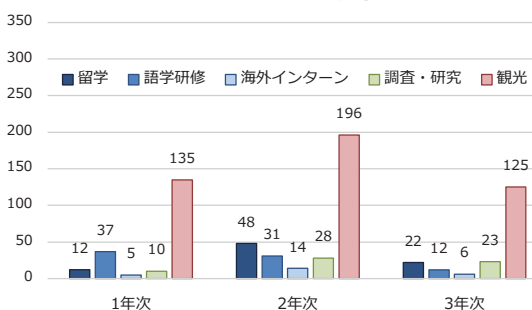


図5：学部別の渡航年次

